

第3回「子母澤寛文学賞」(短編小説部門)【佳作】

「タムシバの咲く頃」 広島県 木下 訓成

国道二号線沿いの溝にかかっている橋を渡って石段を五、六段上がると、目の前に山陽本線の鉄路が光っている。

私はしばらく呼吸を整えたあとで踏切を渡りながら、終戦直後の遮断機も警報器もなかったこの踏切で、私のいちばんの仲良しだった石井太一が汽車に轢かれて死んだことを思い出した。

踏切を渡って《今伊勢宮》へ上る長い石段の登り口に立って見上げながら、腕白だったけれども親孝行でもあった石井太一が、母親の病氣快復を祈願しにやって来たというのに、ここの神社の神様はどうしてその少年を助けられなかったんだろうかと、子供の頃恨めしく思ったことを、今また思い出した。

石井太一が死んで七十年以上も過ぎ去った茫々たる歳月を思い起こしながら、私は錆びついた手摺りにすがって石段を登り始めた。

と、上のほうから足音が聞こえてくる。見上げるとおかつぱ頭の少女が降りて来る。

私の脇まで下りてくると、少女のほうから声を掛けてきた。

「こんにちは！」

「やあ、こんにちは。一人で来たのかい？」

「はい」

「お参りに？」

「そう、うちのおばあちゃんの病気が、早く治りますようにって……」

「そうかそうか、それは感心だな。おばあちゃん、きっとよくなるよ」

「ありがと！」

「帰りしなには、そこの下の踏切のところを、気をつけて渡るんだよ」

「はい！」

少女と別れると私はすぐにまた石井太一のことを思い出した。

同じ村うちに住んでいた石井太一と私とは、二人とも父親を戦争で亡くしていた。

戦前戦後の貧しくてひもじい日々を過ごしていた頃、二人は他所の畑のマクワウリやトマトをこっそり盗んでは空腹を凌いでいた。

あの頃の思い出につながる出来事で、すぐに思い出すことがある。

終戦直前の、太一や私が国民学校の二年生の時、同じ学級に、やはり同じ村うちに住む高野俊介というのがいた。

村の辰巳（東南）の方角に聳える《龍王山》の麓の私の家から、同じ山裾の東端にある高野俊介の家までは、僅か一キロほどの距離だったが、同じ村うちに住んでいて、しかも同じ学級にいながら、なにかにつけてとてもずる賢くて、

こすっ^{から}辛い性格の高野俊介のことを、私はあまり好きではなかった。私だけでなく、学級中のほかの誰からも高野俊介は好かれていなかった。

その高野俊介がある日、珍しいガラスの欠片^{かけら}をみんなに見せびらかしていた。一見なんの変哲^{へんてつ}もない欠片のように見えたが、俊介が話すのを聞いてみると、それは飛行機^{ふうこう}の風防ガラスの欠片だということで、その欠片を机の角や椅子^{いす}などの硬い木^{かた}に強くこすりつけると、甘ったるい何とも言えない好い^い匂い^{にお}がした。

それは私が五歳の時に、肺結核^{はいけっかく}で死んだ母親が使っていた三日月形^{あめいろ}の飴色をした櫛^{くし}の匂いにそっくりだった。

私はそれが欲^ほしくてたまらなかった。

しかしそれを譲^{ゆず}り受けるには、高野俊介にとって、そのガラスの欠片以上に興味^ひを惹く物^かを引き換えに与えなければならない。

いくら頭^{しほ}を絞^{しぼ}ってみても、私にはそんな物は思いつかなかった。

ところが一学期^{なか}の半ばを過ぎた頃に、思いもかけない交換条件を、それも高野俊介のほうから持ちかけてきた。

私の家の庭には、六月になると真っ赤に熟^{じゆく}す実^{すずな}を鈴生りにつけるユスラウメの木が二本あった。

ずっと以前の、まだ国民学校に上がる前に、一度だけ高野俊介は友だちと一緒に私の家へ遊びに来たことがあったが、それがたまたまユスラウメの熟^{じき}す時期

で、高野俊介はそのときに掬いで食べたユスラウメの味が忘れられなかったようだ。

彼はガラスの欠片をやるから、そのかわりにユスラウメの実を好きなだけ採らせてくれないかと言ってきたのだ。

私にとっては願ってもない話だった。

物々交換の話し合いはうまくいった。

こうしてガラスの欠片を手にした日の私は、一日中小躍りしながら、薪の切れっ端や西条柿の幹や、物置小屋の柱などにガラスの欠片をこすりつけては、甘ったるい匂いをクンクン嗅いで回った——そして、ふっと母親のことを思い出すのだった。

そんな私の仕種を訝った祖母に、柱にこすりつけたガラスの匂いを嗅がしたが、鼻つんぼの祖母には無駄なことだった。

しかし、その宝物が私のポケットに納まっていたのは、ほんの数日間だった。

欠片を手に入れて三日後の土曜日の放課後、私が学校から帰りしなに《松本古墳》の脇道にさしかかった時、上級生の板倉という評判のワルが待ち伏せしていて、懸命に抵抗する私を易々と押し伏せて、ポケットの中からガラスの欠片を取り上げたのである。

私は死ぬほど悔しい思いをしたが、子供の頃の一年の年齢差というのは大き

く、しかも腕力の勝った大柄な体躯の板倉には到底太刀打ちできなかった。

そうかと言って、受持ちの先生に訴えれば、その後の仕返しのほうが怖くてとてもできなかった。

ところが数日後、私は高野俊介がいつものように、ほかの友だちに例の風防ガラスを見せびらかしているのを偶然目にしたのである。私が不審に思って傍へ寄っていくと、彼は急いでガラスの欠片をポケットへしまい込みながら言った。

「わしゃの、こげんガラスなら、なんぼでもあるとこ知っちよるんじゃ」

ちらっと見たガラスの欠片はあれと同じ形の物に見えたが、私には彼に詰め寄ってそれが同じ物だと言い切る自信はなかった。

それからしばらく後に、私は仲良しの石井太一からこんなことを聞いた。

「あんな、あの上級生のワルの板倉のやつと、高野俊介は従兄弟同士なんじゃ……」

そこで私が例の風防ガラスの一件について話すと、石井太一は舌打ちしながら言った。

「ちえッ！ なんで、もちっと早うにわしに言わなんだんじゃ！」

その翌週の月曜日に、みんなが昼の弁当を食べ終わった頃、高野俊介が不意に顔を両手で覆って奇妙な呻き声を上げ始めた。

どちらかと言うと、見栄っ張りでおまけに、目立ちたがり屋の高野俊介のこ

とだから、また何か変わったことを仕出^{しで}かしてみんなの関心を惹こうとしてい
るんだろうぐらいに思ったが、よく見ると、どうやら本当に苦しんでいるふ
うだった。

級長がすぐに職員室へ走って担任の先生を呼んで来ると、先生は顔を覆った
俊介の手をのけてその顔を覗^{のぞ}き込むなり、慌^{あわ}てて彼を抱えるようにして衛生室
へ連れて行った。

教室の中では、ああだこうだと、いろんな憶測^{おくそく}が騒々^{そうぞう}しく飛び交^かったが、だれ
も本当のことは分からなかった。

その時、さり気^げないふうで衛生室へ偵察^{ていきつ}に行ってきた石井太一が教室に戻^{もど}
て来るなり、そっと私に耳打^{みみう}ちした。

「俊介のやつ、真っ赤にかぶれた顔して衛生室途中で泣いちゃったぞ……」

両親亡きあと祖母^{そふぼ}に育てられていた私は、祖母からしょっちゅう聞かされ
て、しっかりと頭の片隅に覚えていた祖母の戒^{いまし}めの言葉を思い出した。

「よう覚えとけや、悪^{わり}ィことすりゃ、神^{かみ}さんは、ぜっぴバツを下^{くだ}すからの！」

あれは、やっぱり天罰^{てんばつ}じゃったんだ！

尋常^{じんじょう}小学校さえろくに行かなかった祖母は、文字も満足に読み書きできな
かったが、人間の真^まっ当^{どう}な生き方についてはちゃんと教えてくれたのだ。

石井太一が言うように、高野俊介は従兄弟の板倉に、ガラスの欠片を私から取

り戻すよう頼んだに違いない。

ところがずっと後になって分かったことだが、高野俊介のかぶれ騒動はすべて石井太一が仕組んだことだったのだ。

前年の春の遠足で《今伊勢宮》の《内宮》のある頂上までみんなで登った時、高野俊介がハゼの木の葉っぱに触ってひどくかぶれたことを、石井太一はちゃんと覚えていたのだ。石井太一は私から風防ガラスの一件を聞いた翌日の日曜日に、家の近くの《龍王山》へ登って、まだ青々としているハゼの葉とツタウルシの葉を次から次へとちぎっては石で磨り潰して、持ってきた小瓶の中へ詰め込んだ。

石井太一自身は、ウルシやハゼにはかぶれない体質だった。

彼は山を下りる途中で、小川の水を小瓶の中に注ぎ込んでよく振った。

翌日の月曜日、二時限目の授業が終わったあとの休憩時間に、みんなが教室の外へ遊びに出た隙に、石井太一は教室の中に居残って、こっそり高野俊介のアルミの弁当箱を取り出すと、そのおかずの上に例の液体をたっぷり振りかけたのだ。

ゆつくり石段を登りながら、汽車に轢かれた石井太一のそんなことを思い出しているうちに、もう一つの忌まわしい記憶が私の頭をよぎった。

それは私が国民学校の三年生に上がった時のことだった。

二学期になったある日の午後の習字の授業の時に使う半紙の代金を、高野俊介が紛失したことがあった。

ところがこともあろうに、高野俊介はその錢を、午前中の体操の授業の時に、股座の腫れ物のために教室の中に残っていた私が盗んだのだと、担任に告げたのである。

その日の放課後、私は職員室へ呼ばれて担任の先生から厳しく詰問されて、盗んだ錢をどこへ隠したのかと、身体検査までされた。身に覚えのない濡れ衣に、泣きながら抗議したが、夕陽が《龍王山》の後ろに沈む頃まで担任は執拗に責めつづけた。

「……夏休みに、扇屋の畑のトマトを盗んだんは、お前と石井じゃったな。お、そうじゃ、それから、去年の冬に辻屋の干柿盗んだんもお前じゃったな。あ、まだあるぞ。藪裏の寺岡んちの縁の下へもぐり込んで、ニワトリのタマゴを盗んだんも、やっぱりお前と石井じゃったな……」

ところがその翌日、村の駐在所の高橋巡査が備後緋で作った小さな巾着袋を学校へ届けにやって来た。

その巾着袋は高野俊介の小錢入れである。

その中には俊介がみんなに見せびらかしていた例の風防ガラスの欠片と、

一銭硬貨が三枚入っていた——前日の習字に使う半紙一帖の代金は三銭だった。

その日の下校時に、高野俊介の帰る道筋で待ち伏せして、《馬頭観音堂》の裏へ引きずり込んで、彼をこてんぱんに殴り倒したのは、仲良しの石井太一だった。

私は子供の頃から、なにかで気持ちが塞いだ時にはよくやって来たこの《今伊勢宮》へ、今日は何年ぶりかで歩いてやって来たのだが、一ヶ月ほど前に、福山の国立病院で脊柱管狭窄症の手術をして、しばらく入院していた後だったので、いつの間にか歩くという動作を意識して、足許に神経を集中しなければならなくなっていた。

何度も息継ぎをしながら石段を登って、ようやく山の中腹の《外宮》と《天神社》がある境内へたどり着いた。

その境内の中を走り回ったり、忍者の真似をして、右脇にある《忠魂碑》の土台石の上に跳び上がったりしていた石井太一の姿が、記憶の底から浮かび上がってくると、私は思わず溜息まじりに呟いた。

「なあ、太一ちゃんよ、お前さん、なして死んでしもうたんじゃ……」

一息ついた後で、手水舎へ行って手を洗い、さて、もうひと踏ん張りして頂上の《内宮》まで上ろうかと、果てしなく続くように見える長い石段を見上げていると、折りしも綿雲が太陽を覆い、白っぽい石段がさっと灰色に沈んだ。

この神社の祭礼日に、大勢の参詣客のあいだを縫って、石井太一と私はどちら
がこの石段を速く駆け上るか競争したことがあった。走りながら上を見るたび
に、石段はさらに上に伸びてゆくのではないかと思えた。

先に頂上へ着いたのは石井太一だった。

太一は大きな息を吐きながら訊いた。

「ケイちゃんよ、ハア、ハア……」

「なんじゃ？ ハア、ハア……」

「ここの石段の数は、なんぼあった？ ハア、ハア……」

「百一段じゃ、ハア、ハア……」

「ウソこけ、百二段じゃ！」

「いいんや、百一段じゃ！」

ほんとは何段あったんだろうか。

さっき上り始めたとき数えてみるんだったと思いながら、またもや長い石段
をゆつくり登り始めた。

が、すぐさま私の脳裡にまたもや、ある別の記憶が、他の一切の想念のあいだ
を駆け抜けて甦ってきた。

あれは今から六十年ほど昔だったが、私が二十六の歳に、世話する人があって、
伯耆の大山の麓から気立てのいい娘を嫁に貰った。ところが誰が言い触らし始

めたのか、私の嫁の理恵は皆生温泉の怪しげな旅館で働いていた「其者上がり」
だという噂が村うちに広まった。

たしかに理恵は、壁大工をしていた父親が脳梗塞で倒れたあと、苦しい家計を
助けるために、温泉場の旅館で小間使いをしていたが、他人から後ろ指を差され
るようなふしだらな女ではなかった。地元では気立ての良い孝行娘として評判
だった。

そして噂を立てた本人が言い触らしたものらしいのだが、以前その男が皆生
温泉に湯治に出かけた折りに、理恵を相手に一晚遊んだというのである。

どうやらその噂を立てた張本人というのは、高野俊介らしかった。

「そがいな根も葉もねえ噂を立てる奴なんぞ、今に天罰が当たるに
きまっちよる！」

私は、昔、祖母がよく口にしていた言い種を繰り返しては理恵を慰めていた。

それにしても、高野のやつは子供の時分もそうだったが、どこまで根性が振く
れとるんだろうか……。

途中息切れがするたびに石段に腰掛けて休みながら、ようやく天照皇大神が
祀られている頂上の《内宮》に辿りついた。

腰の痛みも始まったので、狛犬の台座の下に腰を下ろして一休みすることに

した。しばらくは五月晴れの空に向けて歯の抜けた口を開け、荒い息を吐きつづけた。

そのときふと、気がついて、私は、自分のもたれかかっている台座の上に載っている、狛犬(阿像)を見上げた。それから今度は向かい側の台座の上に載っている狛犬(吽像)のほうにも眼をやった。そして思わず笑みを浮かべながら呟いた。

「よかったのう……」

二、三年前のことだが、この備前焼の阿吽の狛犬が二軀とも何者かに盗まれて大騒ぎになったことがある。その後犯人が見つかって無事に戻ってきたのか、それとも新しく焼き直したのか、また元通りにちゃんと台座の上に載っかっているのを見て、私はほっとしたのである。

ようやく呼吸を整えたあと、拝殿の前に立つと賽銭をあげて拍手を打った。

再び狛犬の台石に座って、本殿の左手にある《多賀神社》へ向かう鳥居を見つめながら、はて、多賀さんへもお参りしたものでないかと考えた。

子供のころに祖母から教わった言葉が、またもや耳許で聞こえてくる。

「この鳥居の奥にゃの、イザナギノミコトとイザナミノミコトちゅう夫婦の神さんが祀られとるんじゃ、お前も大きゅうなって嫁さんもろうたら、一緒に詣らにゃいけんぞ……」

私は結婚して間なしに、祖母の言いつけどおり、嫁の理恵を連れてこの《多賀

神社》へ参詣に来たことがあった。

あれはたしか田植えの準備に取り掛かるちょうど今時分のことだったが、理恵がこんなことを言っていたのを思い出す。

《龍王山》の青い山肌やまはだに、ポツリ、ポツリと白い碁石ごいしを打ったように見える花を見上げながら、彼女が呟いた。

「タムシバがきれいに咲いちよるけに、今年も豊作ほうさくじゃね」

それを聞いた私は彼女に訊いた。

「ん？ あの白しろえ花はコブシじゃろう。お前んとこの里さとのほうじゃ、コブシのことをタムシバ言うんかいの？」

「え？ あんた、あれはな、よう間違えられるんじゃが、コブシじゃのうてタムシバなんじゃがね」

「ふうん……なら、そのタムシバちゅうんは、コブシとどげん違うんじゃ？」

「あれがもしコブシじゃったらな、もうちっとぎょうさんの花が枝に付いちよるし、それに木のねき(近く)へ行ってみりゃよう分かるけど、コブシの花の付け根んところにはな、どれにもみな必ず若芽わかめが一枚くつついちよるんじゃが。じゃけんどね、あれはタムシバじゃから、そげな若芽はついちよらんのよ」

あのとき私は思ったものである——理恵はわしなんぞよりよっぽど賢いのうと。

理恵は今朝早く、百日咳ひやくにちぜきで寝込んでいる曾孫ひまごの見舞いおのみちに尾道へ出かけて行った。

私はできれば今日は家にいて留守番をすべきだったろうかと思った。というのも十三年も飼かっている老いた雌猫めねこのミケが、私が出かけようとする、何ともさびしそうな眼をして玄関先までヨタヨタ出て来たのだ……。

そんなことを考えている時、《多賀神社》の方から足音あしおとが聞こえてきた。

しばらくすると、鳥居の奥くらの暗がりから一人の男が降りてきた。男は私と同じくらいの年恰好としかつこうのようだが、腰がまがっていてコトコトと杖つえを突きながら歩いている。

そして、しきりに何やらぶつぶつ独り言ひとごとを言っている。

やがて鳥居をくぐってこちらへ近づいて来る男を見るなり、はて、どこかで見たことのあるような顔だが、誰だったろうかと首をひねった。近頃はよく知った顔の人に出くわしても、なかなか名前が思い出せなくなった。

はて、誰じゃろう？

相手の男も、狛犬の台座の下に座っている私に気がついたらしいが、どうやらひどく視力おどろが衰えている様子で、つと立ち止まると、眼すがを眇めるようにしながら、じっとこちらを見ている……。

やがて、ぼそりと言った。

「……あんた……ケイゾウさんか？」

「うん、そうじゃ！……そいで、あんたは誰なんじゃ？」

「わしゃ、川向こうのタカノじゃ」

「なに？ タカノ？……タカノのシュンスケさんかい!？」

「そうじゃ」

なんと！ 今日はこの《内宮》までの長い石段を登るあいだじゅう私の頭の中にきょらい去来していた、あの数々の不愉快ふゆかいで辛いつら出来事げんきょうの元凶である張本人の高野俊介ではないか！

それにしても、つい一年ほど前に役場の受付で偶然ぐうぜん彼に出くわしたことがあったが、あの時にはまだ昔の面影おもかげが顔のつくりに残っていて、やあ、と言って声を掛けたが、相手はふい、とそっぽを向いてしまった。

あれからわずか一年ほどの間に、これほど変貌へんぼうしてしまうとは！

見るからにやつれ果てて、擦り切れてしまったような風体ふうたいである。

白い髭ひげは伸び放題で、皺しわだらけのズボンのあちこちに食べかすらしいシミがついている。まるで駅のベンチで寝ている男の風采ふうさいと変わらないほどだ。

「多賀さんへ参りに来たんか？」

「……うん」

「そうか」

すると、こちらが尋ねもしないのに、相手は話し出した。

「それがのう……女房のやつが……」

言いかけて、高野俊介はしばらくのあいだ言い淀んだ。……しかし、やがて、苦渋に満ちた声で話しはじめた。

「……女房のやつがのう、……こないだから、どうも胃の具合がおかしい言うんで、福山の国立病院で診てもらたんじゃ……そしたら、もう、手のつけられんことになってしもうてのう、うん、末期の胃ガンじゃった……」

高野俊介はそれきり俯いて黙りこんだ。

彼は体の重心がうまくとれないのか、前後左右にふらついている。

私は自分の座っている狛犬の土台石を平手でペタペタと叩きながら言った。

「まあ、ここへ掛けるや——」

「うん……おおきに」

彼は足を引きずりながらやって来ると、足許へ杖を放り出して、私の隣の台石の上へよろめきながら、どすんと尻餅をつくようにして座った。

「そりゃ、大変じゃったのう。で、今どうしちよるんじゃ、よめはんは？」

「そのまんま入院しちよる……」

「そうかあ」

「……あがいな、性悪な女房じゃけんどなあ、可哀想でな、どうにかならん

もんじゃろうかと思うて……辛うて、辛うてのう……」

「そりゃ、大変じゃのう」

二人は狛犬の台座の下で、長いあいだ黙ったまま座っていた。

俊介は盛んに鼻水をすすっていたが、やがてまた話し始めた。

「……役場から定期健診^{ていきけんしん}の通知書が来るたんびにのう……女房は、よう言う
とったんじゃ、『ちいとばかり痛え^{いて}からゆうて、医者なんぞへ行けるもんか！』
っちゆうてなあ……我慢強え^{わざわ}のが災いして、手遅れになってしもうたんじゃ…
…」

自や^{まぶた}にのついた目蓋をねっとりしばたたきながら話している。

座っている狛犬の台石が冷たいからなのか、あるいは痔^{じも}持ちのせいなのか、俊
介はしきりに身をよじっている。

しばらくして高野俊介はまた問^{つか}えつかえ話し始めた。

「ケイさんよ……」

「うん？」

それきり長い沈黙……

「どうした、シュンさん？ 何かわしに言いたいことがあるんなら、言うてみ
いや」

「……」

本殿の裏の方^{ほう}でひと声鳴いたカラスの音が、境内の静けさを深めた。

そっと彼を見ると、俯いたままの彼の鼻先から涙なのかそれとも鼻水なのか、ポタポタ^た垂れている……長い沈黙の後に、喉^{のど}を塞がれたような声で話し始めた。

「わしゃあ……わしゃあ……、こげんところで、まさか、お前^{めえ}さんに会おうたあ……夢にも思うとらなんだ……」

「うん、そりゃあ、わしかて、おんなじことじゃ」

相手は俯いたままの姿勢で、白い眉毛^{まゆげ}の下から私を見上げながら言った。

「わしゃあ……お前^{あやま}さんに、……お前^{あやま}さんに、謝らにゃ、いけんのじゃ……」

「わしに？……なにを謝るんじゃ？」

「……おとといな、山裾^{てんこう}の天光さんへ、拜んでもらいに行ったんじゃ……」

“山裾の天光さん”といえは、この村うちの者なら誰でも知っている、評判のいい年老いた女^{おんなきとうし}祈祷師である。

「……そしたらな……天光さんに言われたんじゃ、『お前^{おお}さんは、すね者の大^{おお}嘘^{うそ}つきじゃ、その捻^{ひね}くれた根性をなおして、もういっぺん出直してきんさい！』

ちゅうてな……」

また、長い沈黙。

やがて顔を上げると、彼はまるで知らない人間を見るかのように私の顔をしげしげと見ながら^{しゃが} 嗶^{しゃが}れ声で言った。

「お前さん……わしのことを、……恨^{うら}んどるじゃろうのう？……」

突然、私の胸に甦^{よみが}ってきた先ほどからの様々な記憶が、ある恨み言葉を呼び起こして、今にも喉から飛び出そうと跳^{もが}いた——が、私は頭を振ることで辛うじて抑^{おさ}えた。

「なんのことを言うとするんか、わしにゃ、さっぱり分からんがの」

「ホ、ホンマか？……」

「ホンマじゃ！」

二人は同時に相手の顔を見つめ合い、俊介はまた顔を伏せてしばらく黙り込み、そしてぼそぼそと話し始めた。

「わしゃ……昔、お前さんにガラスの欠片をやったのに……それが惜しゅうなって、イトコに頼んで、取り戻して呉^くれえ言うて頼んだんじゃ」

「ああ、そげんことか……そげん昔のことは、もうどうも思うちょらんけ、忘れてしまえ」

それより、お前さんは、わしがお前さんの銭を盗んだちゅうて、先生に告げ口されたほうが、よっぽど堪^{こた}えちよるんぞ！

「それにのう、わしゃ……お前さんが……米^{よなご}子のほうから、嫁さんもろうたもんでな……、嘘^{うそ}ッ八^{ばち}なことを言い触らしたんじゃ……。ほんまに、悪^{わり}いことをしたと思うちよる……。ほんまに、悔^くやんどるんじゃ……」

俊介は、がくん、がくん、二度ほど頭を振り、そのたびにポタリ、ポタリと鼻汁を落とした。

彼は汚れたシャツの袖そでで目許めもとを拭ふくと、大きく息を吸い込んだ。そしてその息がすす啜り泣きなみに変わり、肩が細かく震ふるえだした。

そうか、そうか、お前さんは、自分のやったことをちゃんと覚えとったんじゃない——終戦直前の七十何年かの昔のことや、わしが嫁をもろうた六十年前のことも……。

私は相手の肩を軽く叩きながら言った。

「——シュンさんよ、そげえな大昔のことなんぞは、もうどうでもええから忘れてしまえ、ええな！」

「こ、こらえてくれるんか、ケイさん？」

「うん、もうどうも思うちょらんぞ！」

しゃくり上げながら黄色い歯をむき出して、尚なおも何か言おうとする俊介を手で制し、私はつづけた。

「わしゃの、これから〃多賀さん〃へ詣って来るつもりじゃ……。うちの曾孫がの、百日咳にかかっちゃうるもんで、ここへ拝みに来たんじゃが、お前さんとこの女房の病気のことも、早うに治してつかあさい言うて、よう頼んでくるからのう——」

俊介の伏せた顔から、ポタリ、ポタリ……。

圭造^{けいぞう}は、ボギリと膝^{ひざ}を鳴らしながら狛犬の台座から立ち上がって、俊介に言った。

「お前、用心して石段を下りいよ、ゆつくりでええからのう」

「うん……」

「そいじゃ、わしはこれから多賀さんへ参ってくるからの」

「うん……」

私は《多賀神社》の鳥居のほうへ向かいかけたが、ふと思い出すことがあって振り向いた。

「のう、シュンさんよ！」

「うん？」

「お前さん、あした……うちへ来んかや」

「……何しに？」

「ほれ、昔うちへユスラウメの木があつたら、あれからもう何べんも取り木したんじゃがの、今年もユスラウメの実がようけ生^なつとるんじゃ、今がちょうど採り頃なんじゃ、のう、あしたうちへ採りに来いや！」

圭造を見上げた俊介が、不意に顔をくしゃくしゃにしながら何か言ったが、ちょうどその時、またしても布を引き裂^きくようなカラスの鳴き声がして、彼の言葉

は聞き取れなかった……。